

## 【平成 25 年度看護研究発表会】



今年度は 3 例の看護研究が発表されました。

### 【救急センター：患者家族が救急センターの看護師に望む対応と情報提供に関する研究】

救急センターでは、患者家族の思いに沿った情報提供や関わりがとれているのかという疑問から研究に取り組み、患者家族に対する情報提供を検証しました。

その結果、最大の感心は病状や今後の検査治療という結果に至りました。緊急入院した家族はいわば危機状態にあり、その回復には関わる看護師の言葉一つでプラスにもマイナスにもなり、短時間に効率よく関わることの大切さを学びました。

### 【4 階西病棟：弾性ストッキングを着用している高齢者の皮膚水分率の変化に関する調査】

4 階西病棟では、術後や安静が必要な高齢患者に用いられる弾性ストッキングのはき直した時の皮膚の落屑する様子を見て、乾燥した皮膚は損傷や回復に影響があるため、皮膚の乾燥の変化の実態を明らかにしたいということから研究に取り組みました。先行研究ではドライスキンと弾性ストッキングとの因果関係は実証されておらず、ストッキング未装着の下肢との比較は困難であったので、ケアの前後で比較し、の高齢者のドライスキンを検証し保湿等のケアの必要性を学ぶことができました。

### 【5 階東病棟：夜間の看護行為に伴う音や光が患者の睡眠に与える影響に関する調査】

5 階東病棟では、夜間の看護行為が入院患者の睡眠の妨げになっていないか検証を行いました。その結果看護師の発生する音、特に喀痰の吸引や車椅子への移動介助で途中覚醒し、体位変換時のライトはさほど影響がなかったという結果となりました。眠りの環境を整えるには、入眠前の環境整備や眠りが浅ければ小さな音でも覚醒してしまうため、日中からの関わり大切さということも学びました。

3 例とも研究結果から、今後のケアや関わり方など取り組みの必要性を示唆される結果となりました。

今回の研究では、我々が働く中でふとした小さな疑問から研究仮説を立てて研究に望んでいます。

臨床現場での研究は、結果から臨床を変えていくための根拠となる必要があります。研究のための研究とならず、意味のある研究が活発に行われることを期待します。良い研究がなければ裏付けのある良い看護実践は成り立たない、良い臨床実践がないところでは良い看護研究はできない。ご協力いただいた患者さんやご家族の皆さん、指導していただいた先生方に感謝いたします。

座長：救急センター 北澤 勉

昭和伊南総合病院 看護部